

## ◆◆◆ オゾン層の最近の動き — 依然、大きい南極のオゾンホール —

気象庁では、オゾン層の保護及びオゾン層破壊による影響を把握するため、長期にわたり上空のオゾン量と地上の紫外線量の観測を続けており、その観測結果をもとに得られた解析結果をとりまとめ、毎年「オゾン層観測報告」として公表しています。今般、2008年の状況についての「オゾン層観測報告：2008」が気象庁から公表されました。同報告の概要は次のとおりです。

### 【世界のオゾン層】

世界のオゾン全量の推移をみると、1980年代を中心に減少が進み、現在も少ない状態が続いている。2008年のオゾン全量の分布をみると、殆どの地域で参照値（1979～1992年の平均値）より少なく、特に両半球の中高緯度帯で少なかった。

### 【日本上空のオゾン層】

国内3地点（札幌、つくば、那覇）の観測によると、日本上空のオゾン全量は1980年代から1990年代半ばにかけてその減少が進んだが、その後は殆ど変化がないか、緩やかな増加傾向がみられる。2008年の我が国上空のオゾン全量は、参照値（1971年（那覇は、1974年）～2000年の平均値）と比べて、札幌では並か少なく、つくばでは2月と5月に少なかったが8月から10月にかけて多かった。那覇では7月から10月にかけて多かった。

### 【南極オゾンホールと北半球高緯度のオゾン層】

オゾンホールとは、南極上空のオゾン量が極端に少なくなり、オゾン層に穴が空いたような状態となる現象である。2008年のオゾンホールは、面積、欠損量（破壊量）ともに最近10年間（1999年以降）の平均を上回る規模であった。南極オゾンホールの規模の変化を長期的にみると、1980年代から1990年代半ばにかけて急激に拡大したが、その後は増加傾向が緩やかになっているものの、依然として大きい状態が続いている。また、北半球高緯度（北緯60度以北）の1990年以降のオゾン全量はそれ以前に比べて少なくなっている。2008年は3月に中央アジアから東シベリアにかけてオゾン全量の少ない領域がみられた。

### 【国内および南極域における紫外線】

国内3地点（札幌、つくば、那覇）の観測によると、札幌の紫外線量は長期的にみて1990年代初めから統計的に有意に増加している。つくばと那覇についても、長期的に緩やかな増加傾向を示している。2008年の紫外線量は参照値（1991年（つくばは1990年）～2007年の平均値）と比べて、3地点とも並か多かった。また、2008年の南極昭和基地の紫外線量は、オゾンホールの最盛期である10月以降は多めであり、特に12月は多かった。

なお、「オゾン層観測報告：2008」の全文は気象庁ホームページ（<http://www.data.kishou.go.jp/obs-env/ozonehp/o3report2008.html>）からご覧いただけます。